



中学校区ごとの夏の研修会から（写真の説明は9ページ）



1 拡大中学校区



2 南中学校区



3 中里中学校区



4 松代中学校区

巻頭言 『「感謝」を自分の力に』

学校教育課 課長補佐 小林 秀幸

今年度より、学校教育課課長補佐を拝命しました、小林秀幸です。マンガ「ワンピース」をこよなく愛し、単行本を読み返しては、伏線回収に人生の多くの時間を費やし続けるアラフィフです。

そんな私ですが、この夏は流石にパリ五輪に沸きました。金メダルを獲得し涙を流す選手に、幾度となくもらい泣きさせてもらいました。これまでの五輪では、「自分を褒めたい」など一人称で喜びを表現する選手が多い印象がありましたが、パリ五輪は少し印象が異なります。メダルを獲得した選手もそうでなかった選手も喜びや悔しさよりも、家族やコーチなどサポーターへの感謝を口にする選手が多かった、と振り返っています。特に、レスリング女子 50 キロ級の須崎優衣選手。2大会連続の金メダルを期待されながら、1回戦でまさかの敗退後、サポーターへの申し訳なさを全面に吐露していました。その自分を支え、五輪に導いてくれた関係各位への感謝の気持ちがあってこそ、敗者復

活戦から見事、銅メダルを獲得する原動力になったと信じて疑いません。まさに、他者への「感謝」を自分の力に変えた好事例と言えるのではないのでしょうか。

さて、話を「ワンピース」に変えますが、私はサンジが海上レストラン「バラティエ」のオーナー・ゼフに放った感謝の一言が最も好きです。「ワンピース」7～8巻を読み返し、オーナー・ゼフが片足である理由、サンジがルフィの誘いを拒んだ理由が明らかになったとき、「オーナー・ゼフ、長い間、クソお世話になりました」の一言に涙腺崩壊必至です（笑）

小中一貫教育

■ 川治小学校のソーシャルスキル教育研修に学ぶ

8月22日(木)に川治小学校では、「居心地のよい学級づくりアドバイザー学校訪問」の研修を行い、早稲田大学の伊佐貢一客員教授からソーシャルスキル教育について学ぶ機会をもちました。川治小学校が伊佐先生からご指導をいただくのは4年連続だそうです。

「居心地のよい学級づくり」を進める上で、子どもの対人関係能力の育成は大切です。なぜなら、WEBQUの学級満足度に表れる被侵害得点も承認得点も学級内の人間関係の状況に左右される側面が大きいからです。ソーシャルスキル教育は、対人関係の知識を学び、技能を身に付けるために行うという目的をもっており、知識と技能であるがゆえに学校教育で学ぶことができます、ということができます。

伊佐先生は「対人関係は、体験でしか学べない」と話しておられます。今回は、ソーシャルスキル教育についての理論と方法について、講話と演習を交えながら研修を深めることができました。

伊佐先生は、ソーシャルスキル教育（以下 SSE）の一般的な進め方を示しながら指導してくださいました。コーチング技法は山本五十六の言葉みたいに思いませんか？

【コーチング技法】

【意識の流れ】

- ① インストラクション（言ってみせる）・・・「そうだな」
- ② モデリング（やってみせる）・・・「なるほど たしかにそうだな」
- ③ リハーサル（させてみる）・・・「自分にもできそうだな」
- ④ フィードバック（ふりかえる・ほめる）・・・「やってみるといい気持ちだな」
- ⑤ 般化（定着：日常生活で実践するようにする）・・・「スキルを実行してよかった」

SSEは、全校一斉に「聴くことは人間関係を築くうえで大切なこと（知識）や、上手な聴き方の4つのスキル（技能）を身に付けること」を伝えた上で各学級で行うことが有効です。学級間の SSE 格差があると、一貫性のない教育を子どもに感じさせることになるからです。

- ① 「インストラクション」では、何のためにソーシャルスキルを学ぶのかを知識として理解させます。そして、上手な話の聴き方の4つのスキルを技能として身に付けるよう指導（演習）します。4つのスキルとは、「①今していることをやめる、②相手を見る、③反応する（頷く、相槌をうつ）、④最後まで聴いて関係のあるコメントを返す」ことです。このスキルは、形だけは意味がありません。自分では上手な聴き方のスキルを実行しているつもりでも、それが相手に伝わらなければ相手にいやな気持ち（不安、悲しさ、怒りなど）を抱かせることがあることに気付くよう指導しなければなりません。

② 「モデリング」は、子どもにとっては観察学習ですから、観察する視点を示しておく必要があります。逆に言えば、教師の側はその視点に沿った演技（それが相手に与える影響を考慮）をすることが求められます。演技前や演技後に演技者間あるいは子どもへの働きかけをします。「〇〇さんの聴き方は、なぜ良くなかったのでしょうか。」「〇〇さんがどのような気持ちになるか見ていてください。」などの言葉を用意しておきます。

③ 「リハーサル」では、事前に練習の仕方やルールなどを指示して、ふざけや照れを防ぎ整然と練習できるようにします。その際、ペアリングやグルーピングに配慮することも大切です。抵抗の少ない相手から始め、徐々に抵抗の大きい相手へと刺激般化していきます。小学校低学年では、教師が示したシナリオ通りに演じさせますが、中学年以降は、自分らしい言い方で伝えたり、その場にふさわしい演技方（言葉や態度など）を考えさせたりします。その方がねらいとするソーシャルスキルが確かに身に付くようになるからです。

④ 「フィードバック」は、子ども達に自信をもたせ、意欲を高めるねらいがあります。うまく練習できている組に発表してもらい、発表する側には自信を、見る側にはモデリングと同じような効果を高めます。

⑤ 「般化」の促進がとても重要だと伊佐先生は強調されます。どのようにすれば学んだソーシャルスキルを日常生活で使えるようになるのでしょうか。まず、教師が日常の授業や教育活動でモデルを示すことが求められます。1日の流れ中では、朝の会でSST（ソーシャルスキルトレーニング）として行い、1日意識して実行し、帰りの会で振り返る（短時間の発表や記録など）ことなどが考えられます。学年だよりや参観日の公開など家庭との連携を意識する取組も有効と話しておられました。



伊佐先生は、活性度を高める授業づくりについて時間をかけて説明してくれました。特に十日町小学校での研修会と同じように、対話的で深い学びを成立させるためには「き（聞・聴・訊）き合う」関係性を①安心して話ができる→②会話を楽しむ→③対話（異質な他者との交流）へと高めるステップが大切であることを話されました。

対話的で深い学びを具現しようといくつかの学校でグループ学習に力を注いでいる例を見ることがあります。しかし、子どもが自分のメモやノートを読み見合うだけの発表的な会話にとどまり、き（聞・聴・訊）き合いから対話が生まれる探究的な会話に発展しない様子がしばしば見受けられます。

「き（聞・聴・訊）き合う」関係性を育てることについて7月号に書いたことを再掲します。

- ① 他者の声を聴くことは学びの出発点であること
- ② 一人一人が主人公（自分も相手も主人公）であるという学習集団であること
- ③ 教室を「競争の文化」から「共同の文化」に立脚した場にすること（友達の発言に耳を傾けずに「はい！はい！」自分の主張ばかりする子どもが主人公の教室や、誤答に対して「ちがいます！」が声高に叫ばれる教室を変えていかなければなりません）
- ④ 教師は、子どもの声を聴き、それをつないで思考を促すスキルを身に付けること
- ⑤ 「き（聞・聴・訊）き合う」関係は「探究と共同の学び」の必要条件であること

聴き合う関係性を作るには、①教師がモデルを示す（教師の仕事を話すことから聴くことにシフトする）、②声の小さい子どもには、「〇〇さんになるほどと思うことを言ったよ。みんなでもう一度聴いてみよう。〇〇さん、もう少しみんなが聴こえるように話してごらん。」と働きかける、③リボイス（「〇〇さんが言ったことをあなたの言葉で言い換えてごらん。」と子どもの理解したことを説明させる）などの方法があります。

伊佐先生は、聴き合う関係性については、佐藤学先生（東京大学名誉教授）が提唱する「学びの共同体」を基本としておられます。「学びの共同体」については、私は茅ヶ崎市立浜之郷小学校の実践で初めて目にしました。興味のある方は、下の書籍を読まれることをお勧めします（お貸ししても構いません）。



小学館 2000 年 12 月



小学館 2003 年 11 月



小学館 2004 年 4 月

今から 20 年も前の本で、インターネットでしか手に入れないと思います。末期がんで退職 2 か月前に亡くなった大瀬敏昭校長の穏やかながら壮絶な生きざまに大きな影響を受けました。

話題が逸れて申し訳ありません。9 時～12 時 15 分まで 3 時間を超える研修でしたが、川治小学校の先生方がとても楽しそうに研修しておられる姿を拝見し、嬉しく、頼もしく思いました。先生方も子どもたちも人間ですから、研修したことの成果がはっきり見えるようになるには時間を要すると思います。ですが、4 年間伊佐先生をお招きして学んでこられたことは、必ず川治小学校の子どもたちの自己有用感の向上に資するものと確信した時間でした。

教育相談班より

■ 1学期の「不登校・いじめ認知」の状況

○不登校の状況（令和6年4～7月）

※（ ）内は、昨年度同時期の値

	小学生	中学生	小中 計
不登校児童生徒の割合	0.4% (0.38%)	3.39% (3.17%)	1.39% (1.32%)

不登校児童生徒の割合を昨年度の同時期と比較すると、**小学生：同程度**、**中学生：微増**でした。新規の不登校児童生徒の割合については、**R5：0.31%→R6：0.13%**と大幅に低くなっています。引き続き、**課題予防的生徒指導**によるきめ細やかな対応・支援をお願いします。

<課題予防的生徒指導>

※「生徒指導提要」を踏まえた十日町市の取組

●課題未然防止教育

- ・ **SOSを出すこと**の大切さを気づかせる
→ 「**SOSの出し方に関する教育**」の年1回実施
- ・ 教職員の相談力向上のための取組 → **教育相談体制の構築**

●課題早期発見対応

- ・ 教職員の**受信力向上と情報共有**
→ **不登校対策校内委員会（ケース会議）**の開催
欠席3日以上の子どもの**児童生徒の把握と報告**
- ・ 保健室、相談室との連携 → **相談員、SC、SSWの活用**
- ・ 保護者との日ごろからの関係づくり → **子どもとともに1・2・3運動**

○いじめ認知の状況（令和6年4～7月）

※（ ）内は、昨年度同時期の値

	小学生	中学生	小中 計
いじめ認知件数	102 (55)	23 (36)	125 (91)
1,000人あたりの認知件数	50.8 (26.0)	23.0 (33.6)	41.5 (28.5)

小中学生ともに、いじめ認知件数及び割合は増加傾向であり、1学期末現在、認知件数は昨年度同時期に比べ**小学生 1.34倍**、**中学生 1.24倍**です。今後も、積極的な認知とともに、**課題予防的生徒指導**による取組・対応をお願いします。

<課題予防的生徒指導>

※「生徒指導提要」を踏まえた十日町市の取組

●課題未然防止教育

- ・ **いじめ関係法令**に関する教職員研修の実施
- ・ 「学校いじめ基本方針」の**保護者・地域への周知** → 学校HPへの掲載
- ・ SNS等ネットトラブルに係るいじめ事案の未然防止
→ 「新潟県SNS教育プログラム」を活用した**情報モラル教育**の徹底
- ・ 「いじめ見逃しゼロ運動」の推進

●課題早期発見対応

- ・ いじめに気付くための組織的な取組
→ **児童生徒アンケート**の定期的な実施
→ **教育相談**の定期的な実施



■ 特別支援教育に関する校内支援体制の充実 ～校内委員会の機能強化～

各校において校内委員会は、機能しているでしょうか。校長のリーダーシップの下、児童生徒について幅広く把握し、必要な支援を組織的に対応するための校内支援体制の充実が求められています。具体的には、①通常の学級の中でできる方策を十分に検討する、②通級による指導や特別支援学級の必要性を検討していく、という段階的な検討のプロセスが大切です。

ふれあいの丘支援学校のセンター的機能の活用

○学校巡回相談要請訪問

・・・特別支援教育にかかわって、対応に苦慮している児童生徒について、授業参観、対応協議を行います。

○ほっと一息ふれあいグリーンタイム

・・・日々の悩みや困ったことなど、研修会ではなかなか話せないことを教員同士が気軽に語り合う場です。次回は、12月25日に開催予定です。

※他にも特別支援研修講座の開催や校内研修への講師派遣も行っています。詳しくは、ふれあいの丘支援学校HPを参照ください。

学習指導班より

※市報 10 月 10 日号に掲載予定の内容を紹介します。

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果

ふるさとを愛し 自立して社会で生きる子どもの育成のために

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果

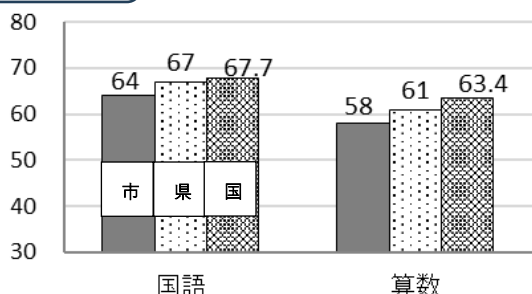
令和6年4月に実施した「全国学力・学習状況調査（対象：小学6年生、中学3年生）」の十日町市の結果をお知らせします。本年度は小学校2教科・中学校2教科の調査が行われました。

この調査は、学校における児童生徒への教育活動の充実や、学習状況の改善等に役立てることを目的にしています。

学力状況（正答率）について（小学校＝国語・算数 中学校＝国語・数学）

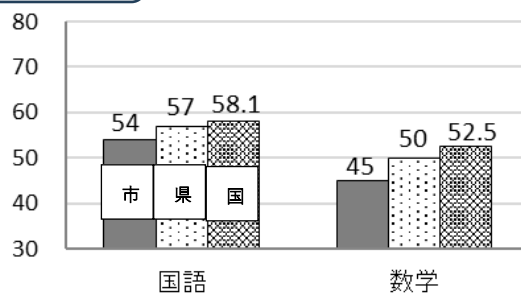
グラフ①

小学校正答率(%)



グラフ②

中学校正答率(%)



小学校の正答率では、国語 64%（県：67%・国：67.7%）、算数 58%（県：61%・国：63.4%）で、国語、算数ともに、全国や県の正答率を下回りました（グラフ①）。

中学校の正答率では、国語 54%（県：57%・国：58.1%）、数学 45%（県：50%・国 52.5%）でした。国語、数学ともに、全国や県を下回りました（グラフ②）。

1 今後の取組について

学力の定着や向上は、学校教育の中でも重要な課題であり、学校の役割の1つです。市教育センターでは、児童生徒の学力の向上を重点課題として捉えています。令和4年度から「居心地のよい学級づくり」事業を各校で教育活動の中核に位置付けてもらい、各学級が全ての児童生徒にとって居心地がよく安心して生活でき、互いに学び合い高め合う集団になるように支援しています。

学力を向上させていくためには、学級内にお互いを認め支え合う関係が広がり、児童生徒自身が安心して生活できていると感じていることが基盤になります。そのような学級の中で、学習意欲や自己実現に対する意欲が高まっていきます。こうしたことから各学校では、日々の学級づくりに学校全体で工夫を凝らしながら取り組んでいます。そしてそれを土台として、日々の授業で子どもたちが「分かった」「できた」と実感できる授業づくりを行っています。今後も、学級づくりと授業づくりを学校の両輪として位置づけ、教育活動を推進し、学力向上を目指していきます。

また、本年度は小中一貫教育の共通したテーマとして、家庭学習の充実を図ることとしています。今までも各中学校区で家庭学習への取組を進めてきましたが、その見直しと一工夫を加えて家庭学習を推進しています。各学校に整備したデジタルドリルも家庭学習の1つで、自分の学習状況に合わせて課題を選ぶことができたり、何回も同じ問題にチャレンジできたり、有効に活用することで学力向上が期待できます。

様々な視点から、引き続き、児童生徒の学力の向上を図っていきます。

2 家庭学習について

次のグラフ③と④は、平日の家庭学習時間の割合を示しています。全国や県と比較すると、小中学生ともに平日に2時間以上家庭学習をしている割合は低い傾向にあり、家庭学習が不足していることが分かります。しかし「全くしない」という児童生徒の割合は低くなっている傾向もあります。

学力の向上のためには、家庭学習は重要な要素です。特にインターネットやSNSを長時間使ってしまう、家庭学習が疎かにならないように気を付けなければなりません。望ましいメディアとの付き合い方を身に付けたり、自分をコントロールしたりできるよう、学校と家庭とが手を取り合い連携した取り組みを引き続き、進めていくことが重要です。

※グラフは無回答を除いているため、100%にはなりません。

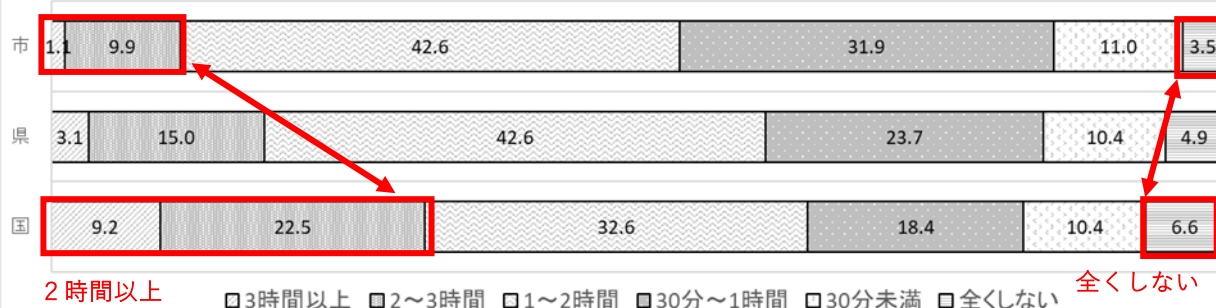
グラフ③

【小学校】学校の授業時間以外で、月～金曜日に一日当たりどのくらい勉強しますか。
(塾や家庭教師を含む。)



グラフ④

【中学校】学校の授業時間以外で、月～金曜日に一日当たりどのくらい勉強しますか。
(塾や家庭教師を含む。)



3 読書時間について

読書量と学力の関係は以前より指摘されています。問題の内容をしっかりと理解しながら読まなければ、問題を解くことが難しくなります。読書は、そのような読解力を高めます。本年度の調査では、読書時間の調査項目はありませんでしたが、今までの調査では、市内の小中学生の読書時間は全国平均を上回り、中学生ではこの3年間で増加傾向にありました。

市教育センターでは、毎月第3日曜日を「家読（うちどく）の日」としています。ぜひ毎日でなくても、「家読の日」には、引き続き、親子で本を楽しんでください。親子の会話も増えると思います。

学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～10・11月～

日 時	内 容 ・ 会 場	備 考
10月28日(月)～ 11月8日(金)	WEBQU調査（2回目）の実施	WEBQU終了後から、事例検討会を行う。
11月1日(金)	エキスパート研修② (仮) 地域素材の教材化により、学びの自己調整力(主体的な学び)の育成	講師：東小学校 大桃 光貴 教諭 対象：希望する全職員
11月14日(木)	新採用・若手事務職員研修	講師：教育センター指導主事他

11月14日(木)	人権教育, 同和教育教職員研修会 【千手中央コミュニティセンター】	講師: 太田 敬祐 様(元新潟県同和教育研究協議会会長) 対象: 教職員, 市関係課職員
11月20日(水)	第4回特別支援教育コーディネーター養成講座「動きの気になる子への指導・支援」 【川西庁舎】	講師: 山崎 正人 様(発達支援センターおひさま 作業療法士) ふれあいの丘支援学校 職員 対象: 特別支援教育コーディネーター—特別支援学級担任
11月21日(木)	図書館教育担当者研修	情報館
11月27日(水)	特別支援教育研修講座 「授業公開講座②」 【ふれあいの丘支援学校】	講師: 村中 智彦 様(新潟大学人文社会科学系大学院教育実践学研究科 教授) 対象: 特別支援学校 職員 特別支援学級担任

【表紙写真の説明】

令和6年度は、全市一斉の研修会は実施せず各中学校区で工夫した研修会を実施していただきました。

写真1 拡大中学校区は新潟医療福祉大学の杉崎弘周教授を講師として「子どものメンタルヘルスと健康教育」をテーマとした講演会を行いました。中学生同士が思春期のストレスにどう対処するかを話し合う動画では、担任の教員が生徒の話合いを深めるために発する問いの重要性について考えさせられました。

写真2 南中学校区は、南中学校の廣田稔教諭を講師として「グレーゾーンの子を支えるさりげない支援の在り方」をテーマとした講演会・グループトークを行いました。支援の方向性として、物的・人的環境の改善、教師の振舞い方の改善、認知の弱みに配慮したアプローチの改善、ユニバーサルデザインに基づく学級の改善を示してくれました。授業改善や学級経営に直接役立つ内容だと感じました。

中里中学校区は、8月1日(水)に十日町市発達支援センターの鈴木皓子主任臨床心理士を講師として「発達検査から見える特性・生活や学習のヒント」についてお話をしていただきました。**写真3**は翌日の「子育てフォーラム」の様子です。糸魚川市の横澤富士子こどもの主任教育相談員を講師として、中里なかよし保育園、田沢小学校、中里中学校の保護者・職員を対象とした講演会を行いました。「こどもの成長とおとなのかかわり」をテーマとして、子育てで大切なことや反抗期の対処法などについてお話してくださいました。参加者は、ペアになって模擬カウンセリングを体験するなど、有意義な研修となりました。

写真4 松代中学校区は、新潟大学の田中恒彦准教授を講師として「いじめ対応について知っておきたいこと」をテーマとしたオンライン講演を行いました。いじめ問題の第三者委員会の経験なども踏まえ、学校としていじめにどのように対応するかを具体的に話してくださいました。いじめ問題の理解と対応についてとても分かりやすい内容だと感じました。